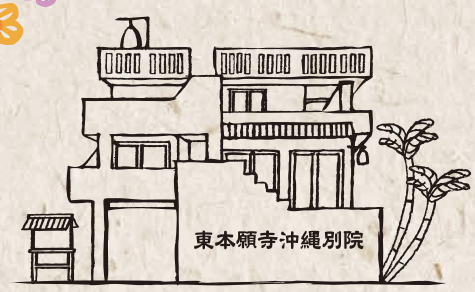
ハイサイ沖縄

1 Jan.| 2022
沖縄開教本部通信
vol.97



※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

真宗大谷派 東本願寺 shinshu Otani-ha

ー目次ー

「運動としての親鸞」　玉光　順正
●報恩講
●コラム
「兵戈無用の国だった琉球国に復帰したく候」安仁屋　眞昭

運動としての親鸞

玉光　順正　（元教学研究所所長）

私と沖縄を考えるとは、金城実、その人から考えるしかない。

彼が私たちの前に直接現れたのは、一九八三年八月「山陽教区非核非戦法要」だった。戦争と人間等、時代を彫る彫刻家、語りかつ書きそして闘う彫刻家として、人々の注目を集め始めていた時でもあった。そのダイナミックな公演は、彼にとってはいつものことでも、私たちにとっては刺激的なものだった。語り、かつ呻き、かつ動き、叫び、まさに行動（運動）でもあった。

終了後の交流会。そこでも彼は飲み、食い、唄い、かつ踊り、議論を吹きかけた。もちろん私たちも同様に、彼の世界に引き込まれた。

翌日彼は、さすが彫刻家、漆喰を買ってきてくれ、記念に彫刻を作ると。早速近くのホームセンターで買ってくると、闘う青年という感じのものを作ってくれた。残念ながらそれは管理も悪く、しばらくして崩れてしまった。

その後何度か、市川・親鸞塾に来てもらっている中で、一九八五年四月、その日も話も酒も盛り上り、親鸞を作ろうとなった。最初は小さな像だったが、たまたまその日は作家の川元祥一さんも同席されていて、宴会の盛り上がりと共に、像も大きくなっていった。早速翌日、ホームセンターで基礎にする材木や、支柱とする鉄線や針金、勿論大量の漆喰も買ってきて親鸞像の制作が始まった。

「運動としての親鸞」金城実作　光明寺（兵庫県神崎郡）

彼は当時、西宮の高校で英語の教師。金曜日夜遅く同僚の教師の車で来て、土曜、日曜と親鸞塾生と共に制作、月曜日にはまた同僚の教師と学校へ、という形でほぼ三か月。

七月十一日完成の除幕式。多くの子供たちも含めて像の高さを当てるクイズや、色々の催し。三國連太郎さんも来てくださった。

その像に「運動としての親鸞」と名づけた。

六〇年代後半から七〇年代、世界では中国のプロレタリア文化大革命、南米の解放の神学。その頃一九七七年『曽我量深説教随聞記』で次のような言葉に出会った。

「親鸞教学は仏教社会学を意味して・・・世界中の人を驚かす時がくるにちがいない。これは還相社会学である。そんな学問が完成されるのは必ずしも遠いことではなかろう。」

何故かその時、これだと。その頃いろいろ刺激をもらっていた、アナーキストで詩人の向井孝さんに自分の方向が決まりましたとメモしたことを思い出す。

それは今でも課題である。「運動としての親鸞」はそんな中で生まれた私のテーマの一つである。同じことを金城さんはかつて「沖縄は我が念仏」とも表現されていた。

ハイサイ沖縄

「報恩講」

十月二十九日、三十日と、本年も東本願寺沖縄別院報恩講が勤まった。昨年は緊急事態宣言の合間での開催であった。本年は緊急事態宣言があける直前であったためか、両日とも十数名のお参りであったが、終わってみれば有難いご縁に出遇わさせていただいた。法要では、これまで県外の寺院で働いていて、コロナ緊急事態中に沖縄に戻った僧侶や名護から来る若い僧侶らが出仕し、力強いお勤めとなった。またお参りいただいた御門徒の方々も、ふだん開催している青年勉強会の参加者や、小中学生を持つ夫婦が家族でお参りくださり、活気のある報恩講となった。

法話は田代輪番にお話しいただき、久しぶりに別院職員と県内僧侶、御門徒の方々と一処に集い会い、和気あいあいとした法会になった。それでも感染症対策として、今年もお斎は控えることとし、毎年お願いしている声楽も見合わせることとなった。ようやく落ち着く気配を見せるコロナ禍。来年は従来通りの報恩講になることを願うばかりである。

―コラム―　兵戈無用の国だった琉球国に復帰したく候

沖縄別院総代／琉球王府おもろ継承第十五代
安仁屋　眞昭

武器無き国ぞ 東方にありしと
聞きて驚きし　流謫の奈翁 君知るや
ひも解く歴史　光輝あり 平和の民の　我がうるま

昭和二十七年（一九五二年）中学一年生の時に習った、太平洋行進曲の二番目の歌詞である。

一八一六年琉球を訪れた英国海軍士官・英艦ライラ号艦長・バジル・ホールが英国への途中、セントヘレナ島に流謫の奈翁（ナポレオン）を訪ねて、「武器もなく平和に治まっている琉球国」の話をしたら「この地球上に武器の無い国があるのか」と奈翁の君が驚いたという話しが伝わってできた詞である。

琉球王国は尚真王（在位一四七七年～一五二六年）時代、武器を棄て 海外交易で、繁栄したといわれる。琉球王国の第一期黄金時代。一六〇九年、薩摩藩の侵略で琉球国も苦難の連続で、曲がりなりにも、中国との冊封制度は維持され、国は存続して、明治十二年（一八七九年）、大和（日本）に併合され、沖縄県となった。維新後の日本は欧米に追い付け・追い越せの掛け声で「富国強兵」の国是の基に、短期間に国力を着けた。日清・日露の戦争にも勝利しアジアの盟主になった気取りで、朝鮮の併合、中国への侵略、軍国主義の花を咲かせ、太平洋戦争で見事に木っ端微塵に散った。散ってよかったと思う。軍国主義者が一掃され、平和な国（？）になったのではないでしょうか。が、我が沖縄は先の大戦では「本土の防波堤」となり、地上戦が展開され、多くの尊い命が犠牲になりました。戦争が終わっても、二十七年間アメリカの統治下におかれ、米軍基地も米軍の意のまま、拡張に拡張され、本土に復帰して来年は五十年になります。世界一危険な飛行場・普天間飛行場の危険性除去の方策もなく、辺野古の海に新たに基地を造るという日本政府のアメリカ追随の姿勢は赦されるものではありません。

普天間飛行場の西側約二〇〇ｍの距離にある東本願寺沖縄別院、そして私の家の上をオスプレイをはじめ、ヘリコプター・軍用機が爆音を立てて飛び交っています。墜落の危険性は当然あります。

嗚呼 何時になったら、兵戈無用の国・琉球国に復帰できるか。大和の皆さん、本土の皆さん、沖縄にある米軍基地に我が事のように関心を寄せて下さい。米軍基地がある限り、沖縄の戦後は終わりません。

沖縄戦の時の五歳の童が八十二歳になっています。戦争で苦労した明治生まれの祖父祖母、父母はすでに亡く、再会も近いが、穀倉地帯の普天間飛行場が返還された報告をしたいものだ。

※「うるま」の「うる」は「サンゴ」という意。
「ま」は「島」の意。兵戈無用・兵隊も武器も無用

ハイサイ沖縄　第97号　2022年1月1日　隔月1日発行　発行所　真宗大谷派沖縄開教本部　発行者　田代賢治
〒901-2223　沖縄県宜野湾市大山2-32-21　TEL 098-890-2490　FAX 098-890-2491　http://shinran-oki.org/